

タラ・ジェイン・オニール：インタビュー

文：ダン・コフーン

タラ・ジェイン・オニールは、その昔、ロダンのメンバーだった。そのバンドは、1990年代初頭に活動を開始したバンドの中でも、僕にとってもっとも重要なバンドのひとつだった。不幸にもスリントのフォロワー扱いされているが、このケンタッキー州ルイヴィルのバンドは、その先輩バンドと同じく、静→動の領域を探索しつつも、もっと複雑で多面的な音楽を作り上げていた。そしてタラは、バンド唯一の女性メンバーだったわけだが、他メンバーの男性的なイケイケ世界に、ある種の繊細さを付け加える役目を担っていた。そうして、やがてバンドを去ると、彼女は、ソノラ・パインやレトシンといったバンドで、より静謐な音楽表現を探求しはじめた。ソロ作品で彼女は、自身の歌声とギターに潜んでいる禁欲的なサウンド・スペースを作り上げるためにディレイ・ペダルを使うようになり、その赤裸々さ、その美しさにおいて、複雑さ、繊細さ、独特の魅力をより際立たせている。

■はじめにロダンのことについて教えてください。メンバーたちとはどうやって知り合ったのか？そして、ロダンの前に、あなたはなにかのバンドにいたのか？ そういったことを。

□わたしたちはルイヴィルの郊外のどこかで出会ったの。同じような嗜好の人間なんて、すぐにピンとくるものだし。みんなハミ出し者だったから。

■『Rusty』は、高校時代の僕にとってレッド・ツェッペリンみたいなものでした。朝起きたときに最初にかけるのも『Rusty』でしたし、家に帰って最初に聴くのも『Rusty』でした。あなたにとって、同じように深い影響を受けたアルバムがあったら教えてください。

□ジェファーソン・エアプレイン、ジョニ・ミッチェル、プリンス、レナード・コーエン、地元のハードコア・バンド、ジョイ・ディヴィジョン、ヴェルヴェット・アンダーグラウンド、パティ・スミスとか、そういうの。今では思い出せないような、もっと無名なバンドもたくさんいたけど。

■どうやってアンダーグラウンド音楽に出会ったんですか？

□高校のとき、サイケデリック音楽をたくさん聴いていたんだけど、そのせいで、親の世界とは決して相容れないライフスタイルへ導かれたんでしょね。ライブがあるととなると出かけ、そこらへんをうろついているだけで、キブンが良かったわ。アンダーグラウンド音楽のカセットやライブなんて、その入門としてピッタリじゃない？ それっぽい音楽が聴ける場所がルイヴィルにはふたつあったし、ハウス・パーティーもちよこちよこあったから。

■レイチェルズにいるジェyson・ノーブルや、あなたのソロ作品のことを考えると、極端にアグレッシヴな音楽からは相当違う世界に行ってしまいましたね(とはいえ、ジェysonは SHIPPING・ニューースを続けていますが)。音響的な面で、よりメロウな面に向かっていった理由を、自分ではどう考えていますか？

□いつでも静かな音楽が好きだったし、音の空間と、音の持続性みたいなものに惹かれていたの。歌も、音楽の質感みたいなものも好きだし、反面、早くてうるさくて耳に痛い音楽だって好き。といつつ、エッジのない音楽だって好きなのよね。フィリップ・グラス、ローリー・アンダーソン、ブライアン・イーノ、同時に、イエロー・スワンズ、ディアフーフ、メルツバウも好きだったりするの。ハーシュでノイジーな即興音楽を演奏することも多々あるし、まあ、そういうのは録音したりリリースしたりしてないけど、個人史の中では音楽的なバランスは取れてるんじゃないかな。ただ、録音してリリースするのが歌ベースの作品になったってだけなの。

■レトシンやソノラ・パインでの作品と、自身のソロとに違いはありますか？ また、あなたの作品すべてを橋渡しするような特別なテーマはなにかありますか？

□それぞれ全部違うわ。新しいレコードってもの自体、それまでの作品とはまったく違うものにしていくし、バンドはバンドで、それぞれみんな違っている。まあ、似たような音響的ヴィジョンといえるようなものが私にあるのは否めないけど、それもちょっと変わってきたように思ってる。今後どうなっていくのかが楽しみだわ……。

■ポートランドは、今まで住んできた他の町と比べてどうですか？ スタンプタウンの好きな面と嫌いな面は？

□わたしが今まで住んできた町を混ぜたような感じね。ルイヴィルみたいに、家に引きこもって家計を節約することだってできるし、良い映画や展覧会、ライブを見に行けたり、イカした人たちと一緒に音楽を作っていけたりする点は、ニューヨークみたいでもある。自分が生きたいように生きていけるから、変人にはこと欠かないし、わたしにとっては珍しいけど、ポートランドという進歩的なバブルが気に入ってるの。わたしが属してるような音楽とアートのコミュニティも居心地がいいしね。でも、均質化、ブティック文化、家賃の高騰みたいなものには眉をひそめちゃうわ。

■あなたは自分のソロ作品で、ループやエフェクト・ペダルを使っていますが、どんなセッティングにしていますか？ また、そのセッティングで、可能になったのはどんなことですか？

□ループを使うのは、即興でジャムするときがほとんどね。曲に、ある種の質感を取り入れるのに使ったりもするけど、誰かと即興で何か演奏しているような感覚の方が近いと思う。私が使っているブーメランって、その特徴として「科学的」ではなく「秘境的」な面が挙げられるんだけど、どのように演奏が発展していくのか、ブーメラン自体が鍵を握っているようにプレイしなきゃいけないの。また、ソロでやるときには、複数の人とやっているような音を出すためにも格好の機材だと言えるわね。曲なんかのことは忘れちゃって、全部をループでやってみるっていう誘惑に抵抗しなきゃな

らないのがチャレンジと言えはチャレンジだけど、まあ、そんなことは多分しないだろうし……。

■『TJO TKO』で、あなたはエレクトロニックな方向に進みましたが、『You Sound, Reflect』で、再びアコースティック・ベースのサウンドに戻ってきました。なぜ、エレクトロニックなものをやめてしまったんですか？

□『TJO TKO』は、ひとつの実験作品だったの。すごく楽しかった。あの作品の要素は『You Sound, Reflect』やライブでも利用したのよ。

■『You Sound, Reflect』から『In Circles』へ、音響的にはどのようなところが進化したと言えるでしょう？

□そうねえ。もっと無加工な音にしたいくて、実際、そうなってると思うわ。

■あなたはヴィジュアル・アーティストでもあります。正規の教育を受けたことはありますか？ また、ヴィジュアル・アートと音楽で共通するテーマはありますか？

□10代の頃からドローイングやペインティングを描いていたけど、アートの学校に通ったことはないの。ほんの赤ちゃんだった時、シンシア・ネルソンの詩集にイラストを書いたこともあるし、何回も展示会をして、画集の発行も1回、新しい画集も1冊進行中なの（編注：『Wings. Strings. Meridians.: A Blighted Bestiary』が2007年11月にイエティ・パブリッシングから発行予定。カラー96ページで、ライブ・ループや発掘デモ音源などを収めた15曲入りCD付属）。アートも音楽も、わたしの場合、同じところから生まれてくるの。私はただ、その間にあるプロセッサー（演算処理装置）みたいなものね。音楽よりもアートの方が、それぞれに違うテーマがあるんだけど、そこが違いと言えば違いね。

■今後の予定は？ ソロ以外に、参加を予定している他のプロジェクトはありますか？

□さっき言った画集のリリースね。あとは、フィルム用に作ったインスト音楽をリリースしたり、友達とのコラボレーション仕事も形にしているところ。それから、もっと気楽な感じのバンドもはじめてところで、春になったらアートの展示やライブに勤しみたいと思ってる。イスタンブールでの展示や来日ツアー。友達のバンドの雇われ（もしくは勝手な）秘蔵メンバーとしてのキャリアも続いていくはずよ。

■オレゴン州ポートランドのブラックバードでのマジカルな一夜、あなたは僕のためだけにセレナーデを歌ってくれましたね。あなたはいつも、歌を捧げられる哀れなオマヌケ野郎を観客の中から指名するんですか？ もちろん素敵な経験でしたが、いたたまれなくなっていましたよ。

□オマヌケを知るにはオマヌケにならなきゃ、ね。